

時代区分	年代	主な生産活動	主な遺物	八王子の遺跡	主なできごと
先土器時代 (旧石器時代)				西野 遺跡 下耕地遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○狩猟・採集の生活。</li> <li>○寒冷な気候。</li> <li>○土器の使用がはじまる。</li> </ul>
縄文時代	草創期	縄文土器	石器	桜田 遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○温暖な気候(海進)。</li> <li>○村ができるはじめる。</li> </ul>
早期	BC. 4000			宮田 遺跡 門田 遺跡 犬目中原遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大規模な村がつくられる。</li> <li>○土器具が多量につくられる。(原始農耕?)</li> </ul>
前期	BC. 3000			甲の原遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○気候が涼しくなる。</li> </ul>
中期					
後期					
晩期	BC. 200				<ul style="list-style-type: none"> <li>○人口が極度にへる。</li> <li>○大陸から稻作文化が入る。</li> </ul>
弥生時代	前期	弥生土器	水稲農業	叶谷 遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○関東でも稻作がはじまる。</li> </ul>
中期				宇津木向原遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○小国家ができる。</li> <li>○邪馬台国女王卑弥呼。</li> <li>○各地域で古墳がつくられる。</li> </ul>
後期				神谷原遺跡	
古墳時代	前期	金屬農器	水稲農業	門田 遺跡 中田 遺跡 船田 遺跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大陸と交流。先進技術が入ってくる。</li> </ul>
中期	300			北大谷古墳	<ul style="list-style-type: none"> <li>○群集墳がさかんにつくられる。</li> <li>○古代統一国家が誕生。</li> <li>○武藏国府・国分寺がつくられる。</li> <li>○平安京に遷都。</li> </ul>
後期	400				<ul style="list-style-type: none"> <li>○関東武士団が出現</li> <li>○鎌倉幕府の成立</li> </ul>
奈良時代					
平安時代					
中世					
近世					
近・現代					



## 門田遺跡の調査

門田遺跡群は、八王子の市街地から南西へ約3kmの門田丘陵上に位置しています。ここは、ちょうど京王線のめじろ台駅の真南にあたります。

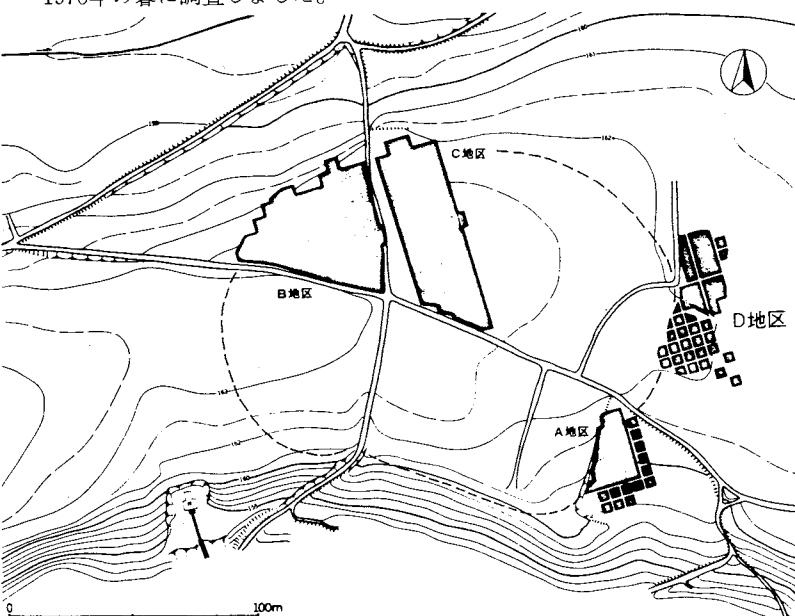
門田遺跡群の調査は、八王子市が行なう土地区画整理事業が契機となっています。区画整理の目的は、市街地周辺の無秩序な宅地化を未然に防ぎ、調和のとれた街づくりをめざしています。一方、地下に埋もれている文化財を保護していくことは、教育委員会の大変な仕事のひとつです。そこで、教育委員会と区画整理部が協議を重ねた結果、区画整理事業に先だって、遺跡全域を発掘調査することになりました。

1974年度は、区画整理対象地84ha全域に、遺構確認のための予備調査を実施しました。この結果、第Ⅰ遺跡～第Ⅴ遺跡という大小5カ所の遺跡の存在が明らかになりました。縄文時代から平安時代まで、各時代によって場所を変えながら、その生活の跡を残していくのです。

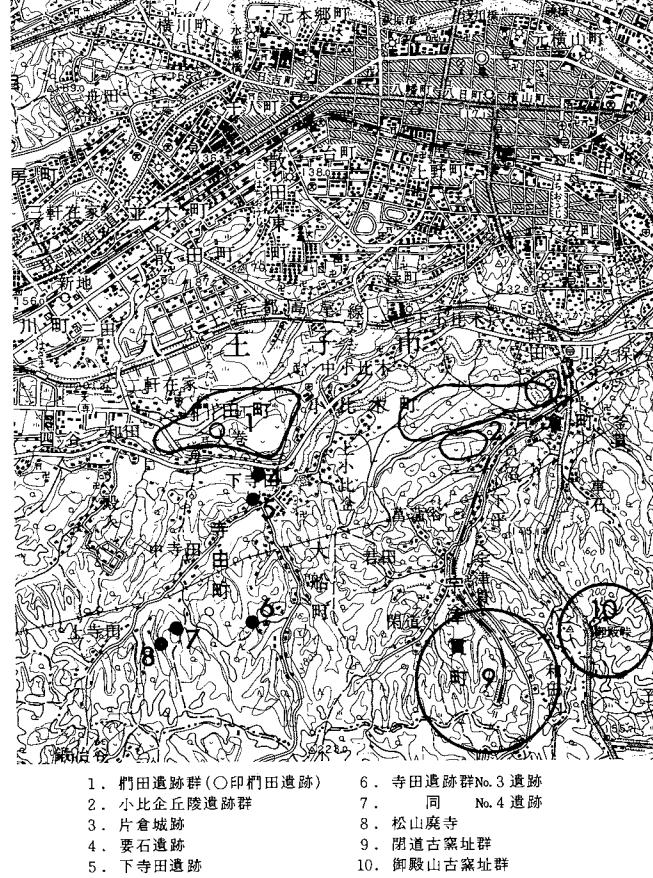
翌1975年度より本格的な発掘調査が開始されました。まず第Ⅰ遺跡の調査を終了し、ひき続き第Ⅲ遺跡に着手しました。以後、継続して発掘調査が行なわれ、現在までに第Ⅳ・第Ⅴ遺跡の調査を完了しました。第Ⅱ遺跡は現在調査中で、1979年度以降も調査が予定されています。

「門田遺跡」は、今まで第Ⅲ遺跡とよんでいた遺跡のことですが、今回国史跡に指定されるということから、わかりやすく「門田遺跡」と命名したものです。

門田遺跡は、1975年3月にその一部が調査されています。A地区で、遺跡の南東隅にあたります。B・C地区は、1975年5月から翌年1月まで本調査を行なった地域です。B地区は調査を完了しましたが、門田遺跡の調査は、その内容の複雑さと、遺物の膨大さから一時中止することになりました。D地区は、遺跡の東の限界を明らかにするために、1976年の暮に調査しました。



▲門田遺跡の地形と発掘区



## 門田遺跡の保存問題

1975年度の門田遺跡の調査は、5月から翌年1月まで約8カ月間、延14,000人を動員して行なわれました。しかしながら、遺跡全体の約 $\frac{1}{8}$ を精査したにすぎませんでした。これは調査団の予想をはるかにうわまわる三時代にわたる集落、ことに縄文時代中期中葉に属する重複した住居址群と、膨大な量の遺物が確認されたからです。

このようにして確認された遺構は、学問的にたいへん貴重な内容をもち、遺跡の保存状態も良好なものでした。そこで調査団では、継続して発掘調査を行なうより、公有化による現状保存が最良の方法であると判断し、調査会に保存要望書を提出しました。

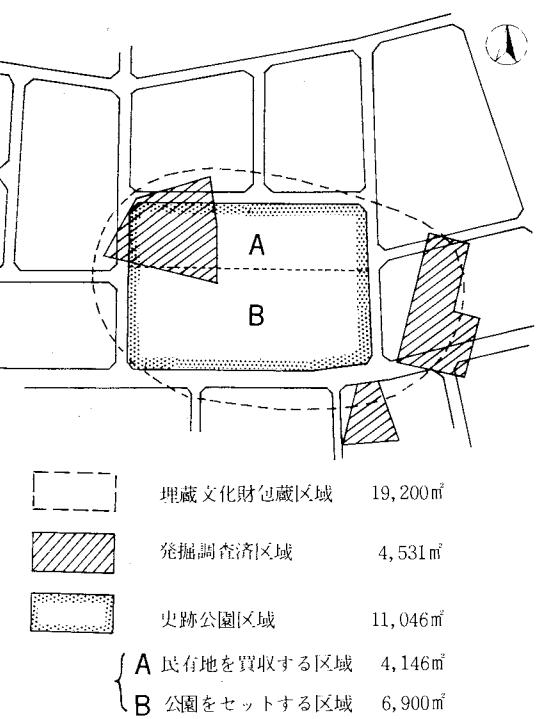
区画整理事業にとって、途中で計画変更することは、大変むずかしい問題です。しかし、区画整理側でも多大な努力がなされ、保存計画案が策定されました。それは、区画整理事業による公園用地を集め、さらに民有地の買収部分を加えた11,046m<sup>2</sup>を史跡公園として保存するものです。変更後の計画では、他の遺跡部分については、現地表面にさらに盛土して遺構を保護することになっています。

このようないきさつをへて、1978年5月11日付の文部省告示105号をもって、史跡公園部分11,046m<sup>2</sup>が国指定の史跡になりました。市民に親しまれる史跡公園づくりが、今後の課題といえましょう。



▲予備調査の状況(10mごとに2×4mの試掘坑をあける)

▼A地区の調査



▲門田遺跡周辺の区画整理計画図



**三つの生活面** 1975年度の発掘調査で、門田遺跡には時代的に異なる三つの生活面があることがわかりました。時代の新しいものほど、現在の地表に近いわけですが、このことを遺跡の層序との関連でみてみましょう。

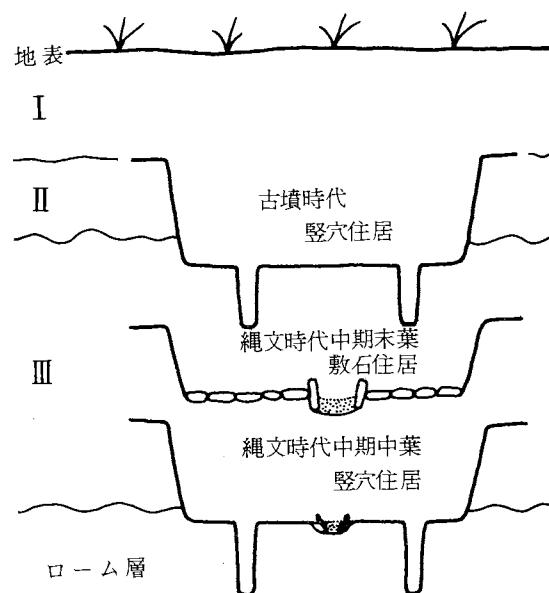
第Ⅰ層は耕作土です。この付近ではあまり深く耕されたようすはみられません。

つぎに第Ⅱ層の暗黄褐色土（新期富士テフラ層）が続きます。1番目の生活面である古墳時代の集落は、この層で確認されます。竪穴住居より出土した土器からみて、西暦6世紀前半のものと考えられます。

第Ⅲ層は、富士黒土層とよばれる黒土が厚く堆積しています。この層の上部で、2番目の生活面、縄文時代中期末葉の集落が発見されます。敷石住居址などの配石遺構が検出されています。C地区は、この面の調査まで終了しています。

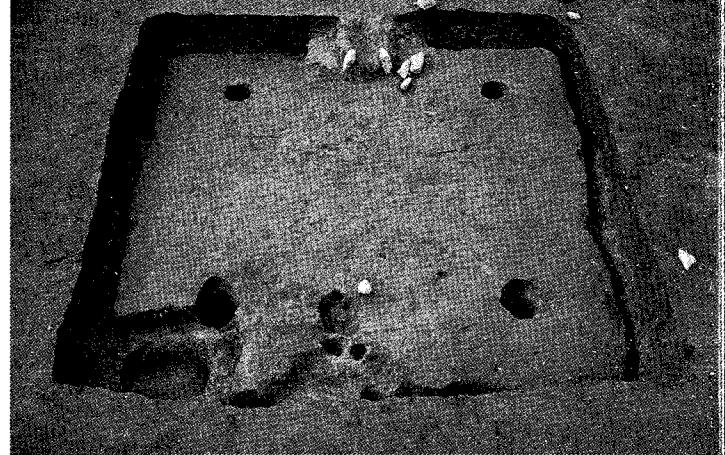
配石遺構の面からさらに5~15cm掘り下げると、3番目の生活面である縄文時代中期中葉の集落が現われてきます。この時期の集落が、門田遺跡の中心的内容をもっています。複雑に重複した竪穴住居址群は、相当長期にわたって集落が営まれたものであることを示しています。B地区は、遺跡全体の約1/4に当たりますが、竪穴住居は45軒発見されています。単純計算しても、全体では300軒以上の存在が予想されます。そして、それらの住居址は、径約150mの環状に展開しているものと思われます。

このように異なった時代の生活の跡が上下三層に発見されたことが、門田遺跡の特徴のひとつになっています。



▲遺構と層序の関係（模式図）

▶縄文時代中期中葉 重複する竪穴住居址群



▲古墳時代 住居 S B51



▲縄文時代中期末葉 敷石住居 S B54

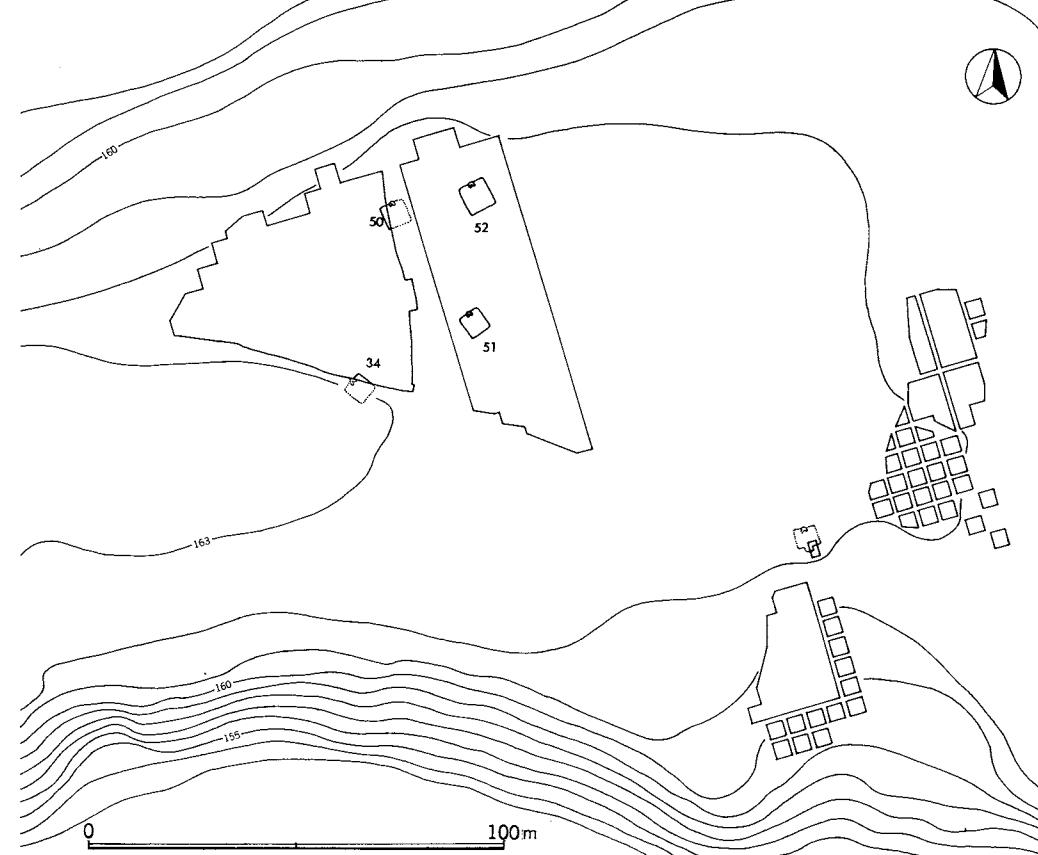
### 古墳時代後期

門田遺跡からは、古墳時代後期の竪穴住居址が、かなりの間隔をおいて発見されています。B地区では道路にかかる2軒、C地区でも2軒が調査され、さらに予備調査の際に南東地区で1軒確認されています。出土した土器は、いずれも鬼高I式とよばれるもので、これらの住居址は同時期に存在していたものと思われます。

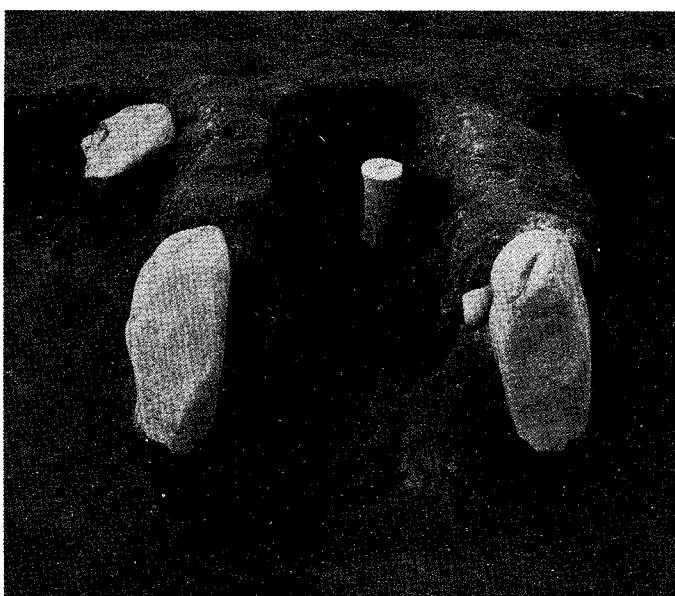
古墳時代後期の竪穴住居は、一辺5~7mの正方形に、地面を約40cm掘り下げてつくられています。床面はよく踏みかためられています。柱をたてるために、床面にはさらに細長い穴が4ヵ所掘られています。南側中央には、入口部に伴なう穴、さらにその西側には、貯蔵用といわれている方形の穴も掘られています。北側の壁には、粘土で竈が構築されています。竈（写真右上）住居S B52の竈は、幅80cm、全長1mの規模をもっています。先端の両側には、長さ40cmの長大な河原石を埋めこんで補強しています。しかし、長い年月をへているために、調査した時には、ほとんどくずれてしまっています。土器をかけたと思われる部分には、高さ15cmの土製支脚がおかれていました。これは、土器を下から支えるためのものです。

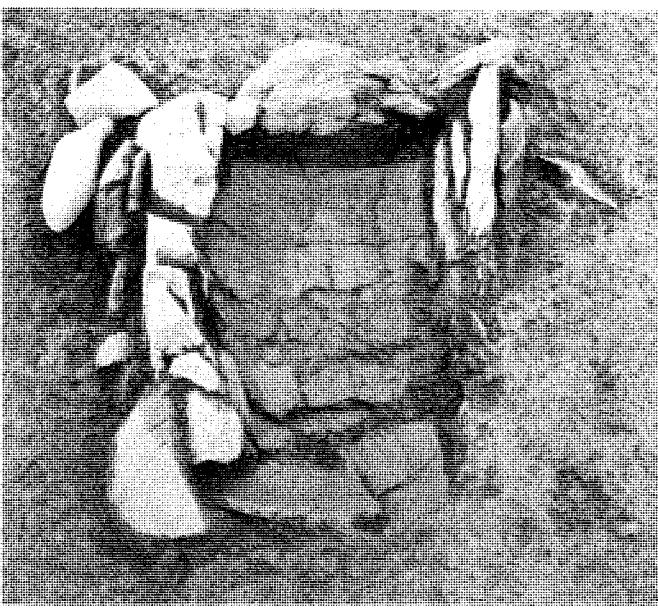
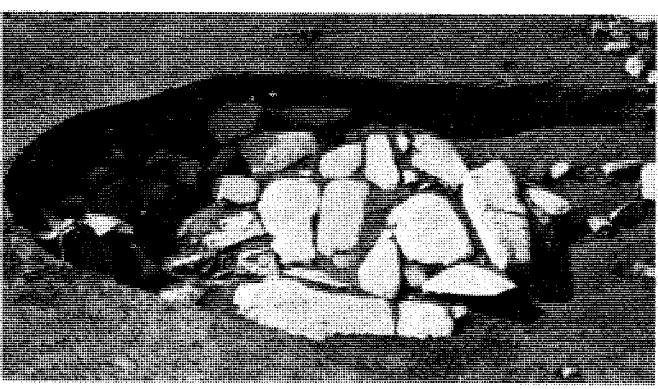
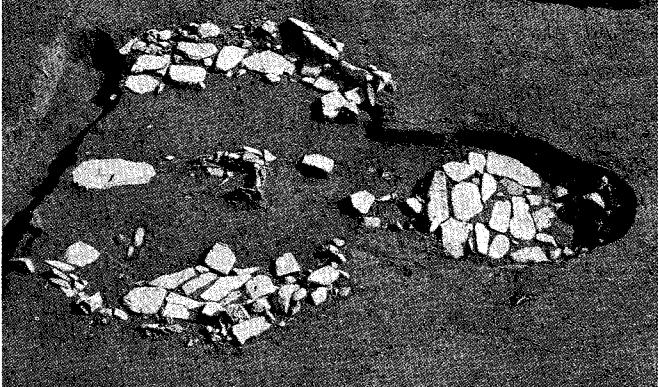
甕や甌は、ほぼ完形に近い状態で、竈の周囲からまとめて出土しています。竈を中心に炊事が行なわれた、当時の生活のようすをうかがうことができます。この時代の甕形土器は、まるみのある胴部が特徴です。甌形土器には、底がないものと、底に小さな穴がたくさんあいたものとがあります。水を入れた甕と組み合せて竈にかけ、米をむしたりしたものでしょう。直径16cm、深さ5cmの甌形土器は、食器として使われたものです。口のまわりは、赤く着色されています。

6世紀前半にあたる古墳時代の門田遺跡では、小さな村がつくられ、農耕が営なまれていたのでしょう。八王子市内にある中田遺跡や、船田遺跡のような同時代の大規模な集落遺跡とは、かなり異なった性格をもつ遺跡といえましょう。



▲古墳時代遺構分布図





### 敷石住居

縄文時代中期の終わり頃（今から約4000年位前）になると、床に石を敷きつめた、敷石住居とよばれる住居があらわれます。鶴田遺跡では、B地区で2軒、C地区で1軒発見されています。予備調査で確認されたものも含めて考えると、10数軒で村をつくっていたものと思われます。

左側の写真は、すべて敷石住居SB53をあらわしています。直径約3.5mの円形の住居部分に、南側へ柄鏡状にのびる張り出し部がついて、全長4.4mになっています。石は全面に敷かれているわけではなく、張り出し部と、住居の縁に沿ってのみ敷かれています。炉の奥に南北に長い石が敷かれていることなどからみると、一軒の住居の中でも仕切りが行なわれ、場所によって使いわけられていたと考えられます。

張り出し部には、とくに長大な石が敷かれています。その先端には土器が埋めてありました。住居部分との境には、一段高い石が用いられ、はっきり区切られています。住居部分の中央には、床を掘りくぼめて炉がつくられています。片岩を縦に使って囲い、底には土器が二重に敷かれています。この住居址からは、土器のほかに、石棒などが出土しています。

実測図で示した敷石住居SB54は、全長5.1mあり、やはり柄鏡のような形をしています。石の大きさは、SB53ほど大きくありません。この住居址では、ローム層まで掘り下げて調査した結果、縁の石に沿って1.2～1.5mの間隔で、直径25cm、深さ約1mの柱穴を検出することができました。このことから、敷石住居は何か特別な遺構ではなく、上に屋根のついた住居であることがわかります。

敷石住居は、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけてつくられたものです。今までに、八王子市内では、10数遺跡から発見されています。このなかには、国の史跡である長房町船田遺跡や、市の史跡に指定されている北野遺跡なども含まれています。

敷石住居の確認される面には、このほかに、石を並べた配石遺構や、土器を埋めた埋甕などが検出されています。C地区からも、この種の遺構が10基検出され、このうちの4基は埋甕を伴っています。

SX32は、土器を埋めこみ、そのまわりを大きな石で囲っています。一見すると炉址のようですが、焼け土は認められません。これらの遺構は、屋外に築かれたもので、墓や祭り用の施設と考えられています。

中期中葉以来、長い間にわたって営まれた集落は、敷石住居址に代表される中期末葉で終わりを告げます。この縄文時代以降は、古墳時代後期にいたるまで、人々の生活した痕跡をみることはできません。

◆敷石住居SB53(上から全景、張り出し部、炉、石棒出土状態)

### 縄文時代中期の終わり頃（今から約4000年位前）になると、床に石を敷きつめた、敷石住居とよばれる住居があらわれます。鶴田遺跡では、B地区で2軒、C地区で1軒発見されています。予備調査で確認されたものも含めて考えると、10数軒で村をつくっていたものと思われます。

左側の写真は、すべて敷石住居SB53をあらわしています。

直径約3.5mの円形の住居部分に、南側へ柄鏡状にのびる張り出し部がついて、全長4.4mになっています。石は全面に敷かれているわけではなく、張り出し部と、住居の縁に沿ってのみ敷かれています。炉の奥に南北に長い石が敷かれていることなどからみると、一軒の住居の中でも仕切りが行なわれ、場所によって使いわけられていたと考えられます。

張り出し部には、とくに長大な石が敷かれています。その先端には土器が埋めてありました。住居部分との境には、一段高い石が用いられ、はっきり区切られています。住居部分の中央には、床を掘りくぼめて炉がつくられています。片岩を縦に使って囲い、底には土器が二重に敷かれています。この住居址からは、土器のほかに、石棒などが出土しています。

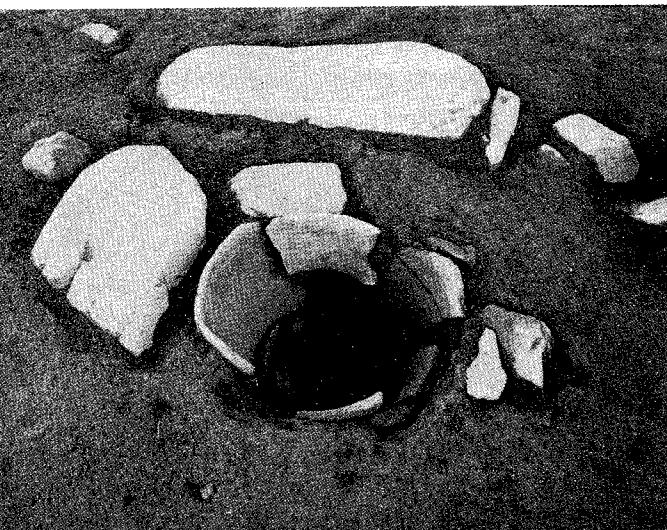
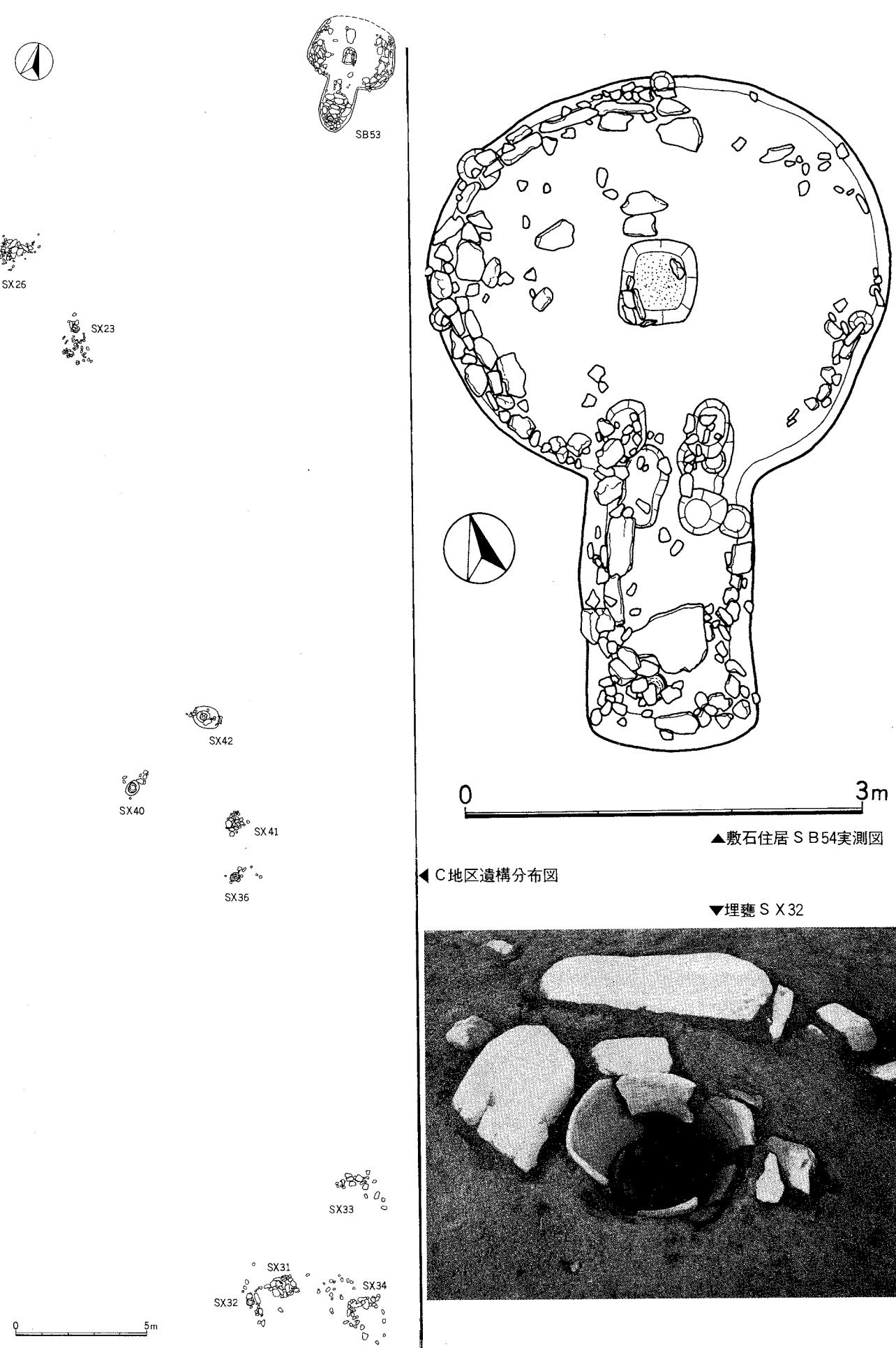
実測図で示した敷石住居SB54は、全長5.1mあり、やはり柄鏡のような形をしています。石の大きさは、SB53ほど大きくありません。この住居址では、ローム層まで掘り下げて調査した結果、縁の石に沿って1.2～1.5mの間隔で、直径25cm、深さ約1mの柱穴を検出することができました。このことから、敷石住居は何か特別な遺構ではなく、上に屋根のついた住居であることがわかります。

敷石住居は、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけてつくられたものです。今までに、八王子市内では、10数遺跡から発見されています。このなかには、国の史跡である長房町船田遺跡や、市の史跡に指定されている北野遺跡なども含まれています。

敷石住居の確認される面には、このほかに、石を並べた配石遺構や、土器を埋めた埋甕などが検出されています。C地区からも、この種の遺構が10基検出され、このうちの4基は埋甕を伴っています。

SX32は、土器を埋めこみ、そのまわりを大きな石で囲っています。一見すると炉址のようですが、焼け土は認められません。これらの遺構は、屋外に築かれたもので、墓や祭り用の施設と考えられています。

中期中葉以来、長い間にわたって営まれた集落は、敷石住居址に代表される中期末葉で終わりを告げます。この縄文時代以降は、古墳時代後期にいたるまで、人々の生活した痕跡をみることはできません。





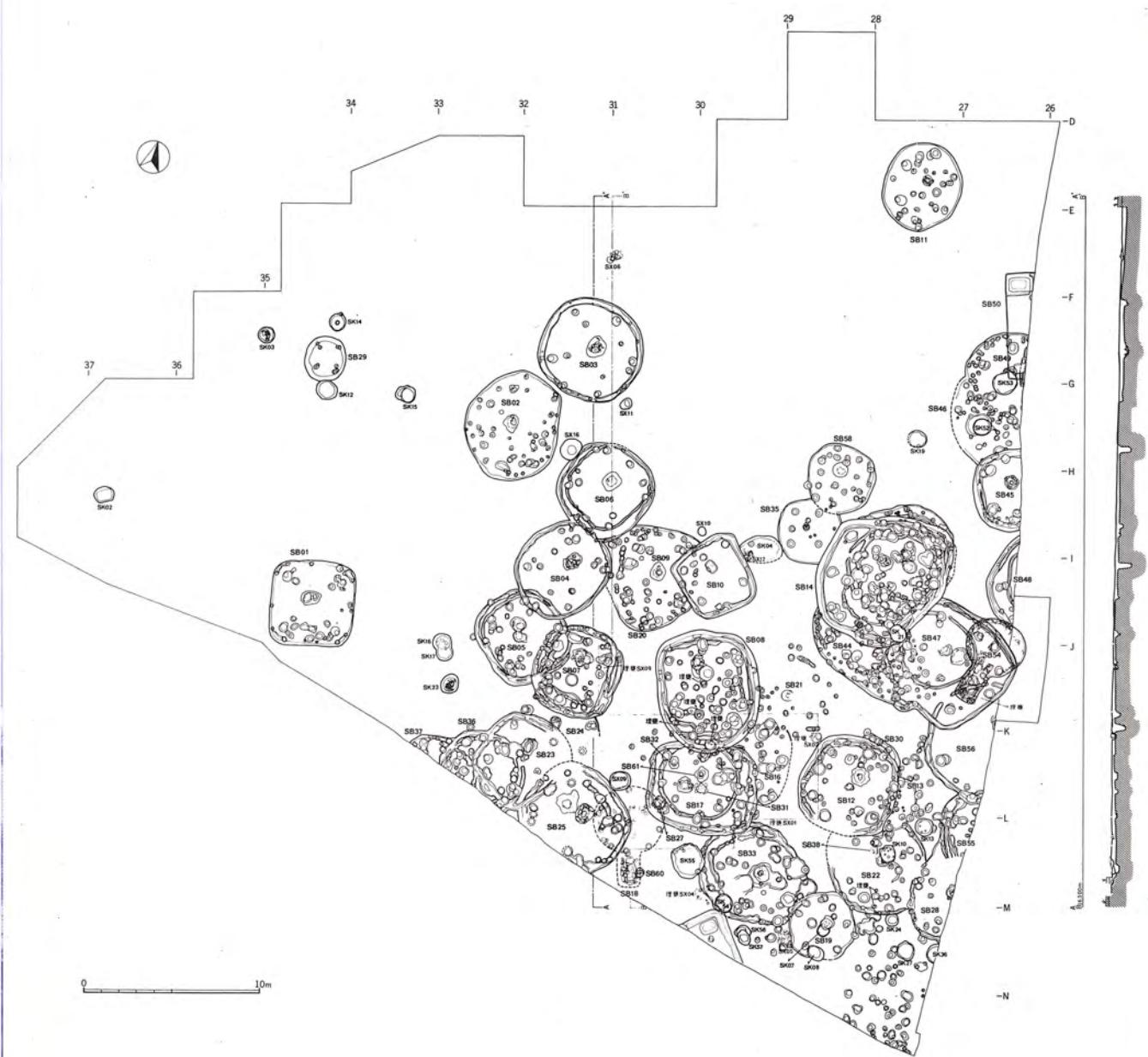
▲発掘状況（東から）



▲住居址の調査



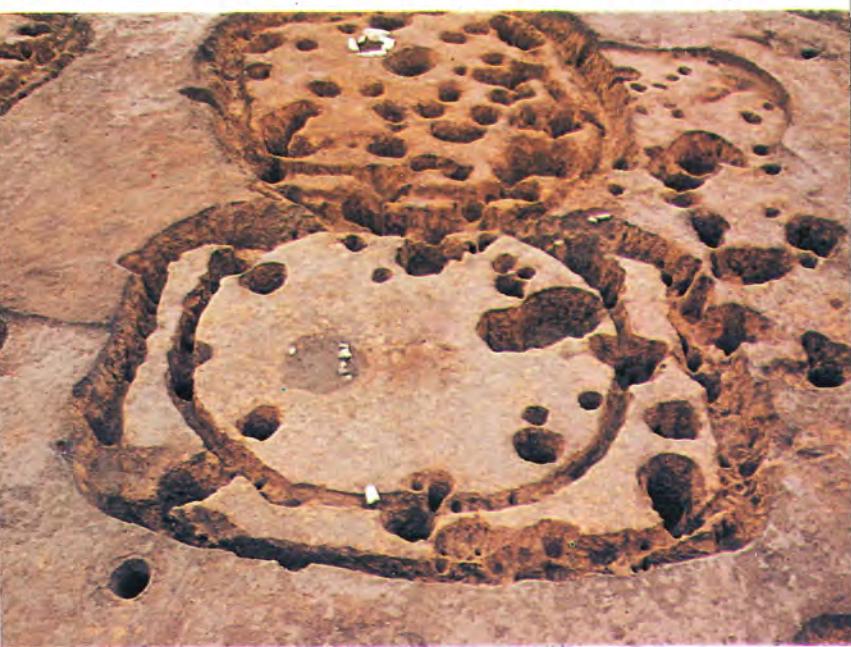
▶調査前の柵田丘陵  
(北東上空より)



柵田遺跡B地区遺構分布図



◀土器の出土状態  
(住居 S B 35)



▶重複する住居址群  
(住居 S B 17周辺)



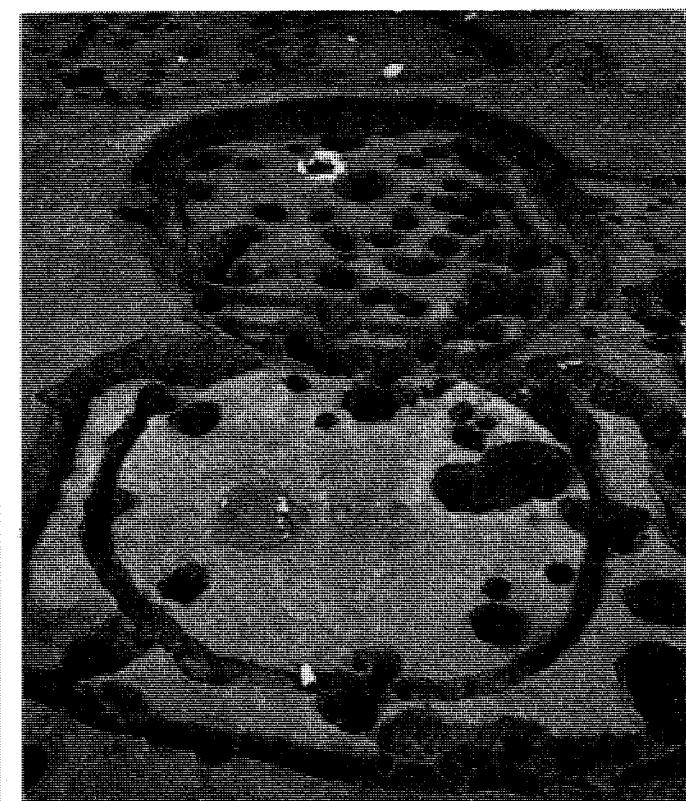
### 重複する住居址群

三つの生活面の最下層には、複雑に重なり合った竪穴住居址群が、ローム層を掘りこんで構築されています。今から約4500年前と考えられる縄文時代中期中葉のもので、本遺跡の中心的な内容をもつ重要なものとして、注目されています。1975年に調査したB地区では、45軒が発見されており、全体では300軒以上の存在が予想されています。

写真からみると、何軒もの家が重なりあって建っていたようにみえますが、実際には、同時に存在していたものは数軒で、しかも、それぞれ間隔をあけて建てられていたと思われます。たくさんの住居が重なりっているのは、それだけ長い期間にわたって、多くの人々がここに住居をかまえた結果といえます。門田遺跡は、この地域にあって、かなり中心的な性格をもった集落だったと考えられます。

住居の形は、円形、楕円形、隅の丸い方形とさまざまです。大きさは、大きいものは7m以上、小さなものは4m前後、さらに例外的に2.5mのものもあります。

ひとつひとつの住居でも、建てかえがおこなわれています。壁の内側にまわる溝が二重だったり、柱の穴が多数存在するのはそのためです。おそらく、住居が古くなっていたんだり、家族がふえて手狭になってくると、柱の位置をすこしづらして建て直したり、ひとまわり大きく拡張したものでしょう。



### 竪穴住居

竪穴住居の調査は、まず土の色のちがいをみて、だいたいの形や大きさをつかみます。つぎに、まわりから流れこんだ土をとりのぞく作業にはいります。この時には、断面が観察できるよう十文字に土手をのこし、住居がうもれていった過程も調べます。土をとりのぞくと、ローム層を掘りこんだ床と壁があらわれてきます。さらに、固くふみしめられた床面をよく調べると、やわらかくて、色の黒い部分がみつかります。これをていねいに掘りあげると、柱穴や炉のあとがあらわれます。

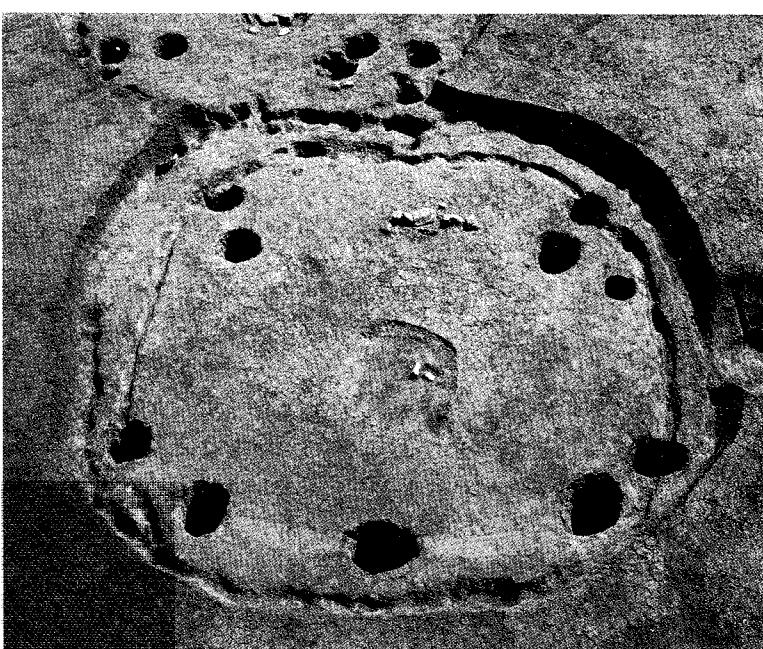
写真右上は、こうして掘りあがった竪穴住居のひとつです。南側に別の住居址、西側に集石土壌が重なっていますが、全体の形は円形をしています。壁にそって溝がめぐり、柱穴は5本検出されました。北側によって、炉のあとがみつかりました。しかし、これで調査が終了したわけではありません。床面をさらに調べると、建て直す以前の柱穴や溝がみつかります(写真右中)。古い柱穴には、ローム層がまじっていました。建てかえの際に、柱をぬきとった古い柱穴に、新しく掘った柱穴の土を埋めもどしたのでしょうか。こうして調査した結果、この住居は向きをほとんどかえることなく拡張されていることがわかりました。しかも、柱の数は4本から5本に増加しています。

炉は土器をうめたり、石で囲ったものが一般的です。しかし、石囲いが完全な状態で発見されたものはたいへん例が少く、大部分は、一部に石が残っていたり、中に薪も込んだものでした。住居を移る時に、炉の石もぬきとられたのでしょうか。

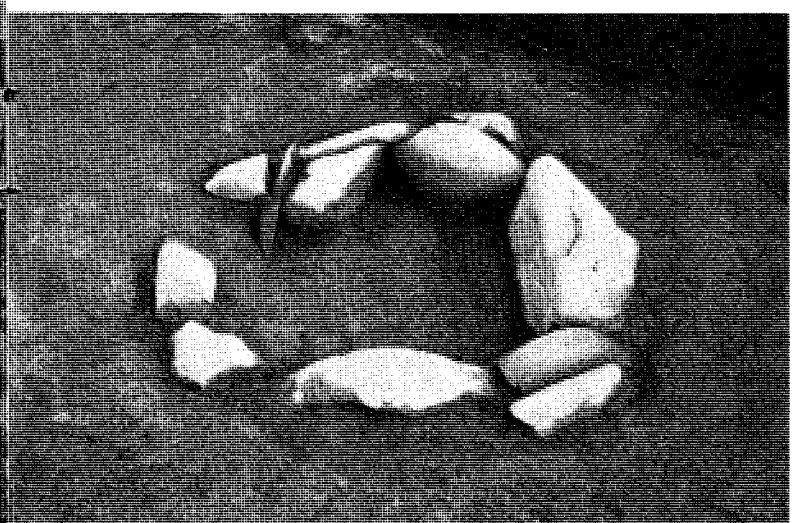
例は少ないですが、床面に土器を埋める風習もみられます。入口部と、炉の近くという二通りがあります。いずれも底がうもかかれています。



▲住居 SB06 (新)



▲住居 SB06 (旧)



▲住居 SB45石器類



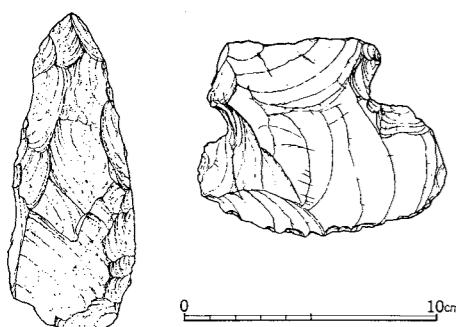
▲住居 SB08床面下埋甕

## 遺物の出土状態

土器がまとまって出土するのは、たいてい住居のなかからです。しかし、住居の住人が、この土器を使っていたとはかぎりません。そこで、発掘の際に、遺物の出土のしかたが問題になるわけです。

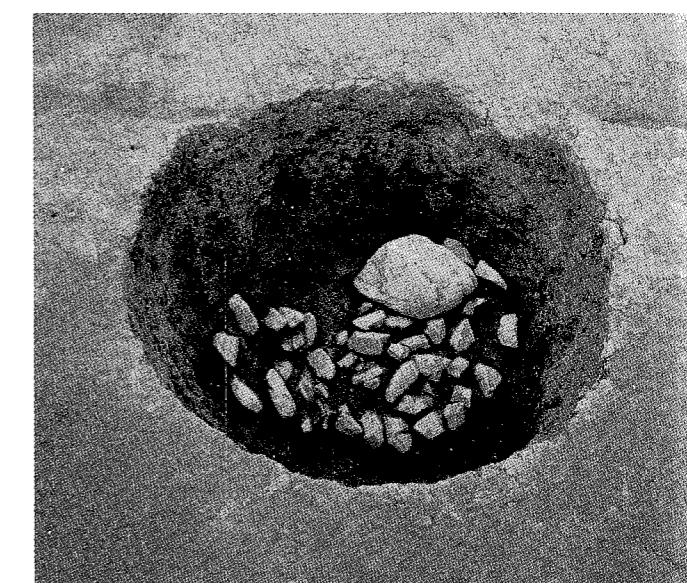
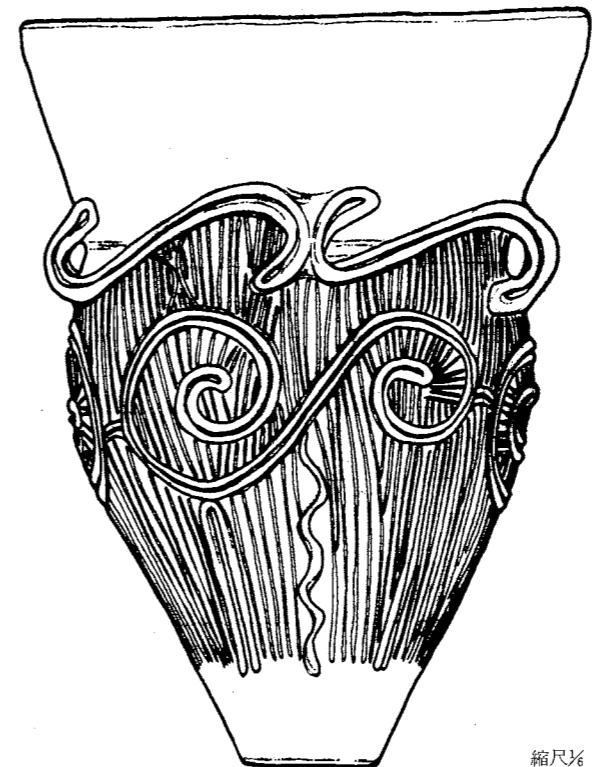
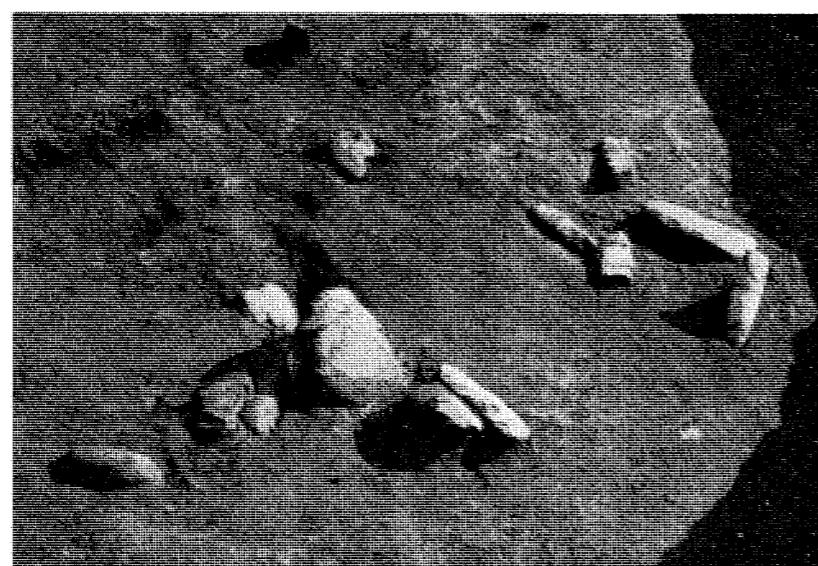
たとえば写真右上のように、土器が住居の床面から10~20cmも離れて出土する場合があります。これは、他の住居に住んでいた人が、使えなくなった土器を、廃墟となった整穴住居のくぼみに投げ捨てたものと考えられます。このほかには、土器の破片が、住居のくぼみに自然に流れこんだものもあります。

写真右下は、石器の出土状態を示しています。この住居は、たまたま火災にあっているため、床面に打製石斧や石匙、凹石などが残されたものと考えられます。木製の柄の部分は焼失していますが、写真右端にある磨製石斧は、柄に接する部分の上・下が黒くこげているので、柄の着けたがよくわかります。また、一軒の住居で必要とする石器の種類と数も、ある程度推量することができます



▲住居 S B11

▼住居 S B44遺物出土状態



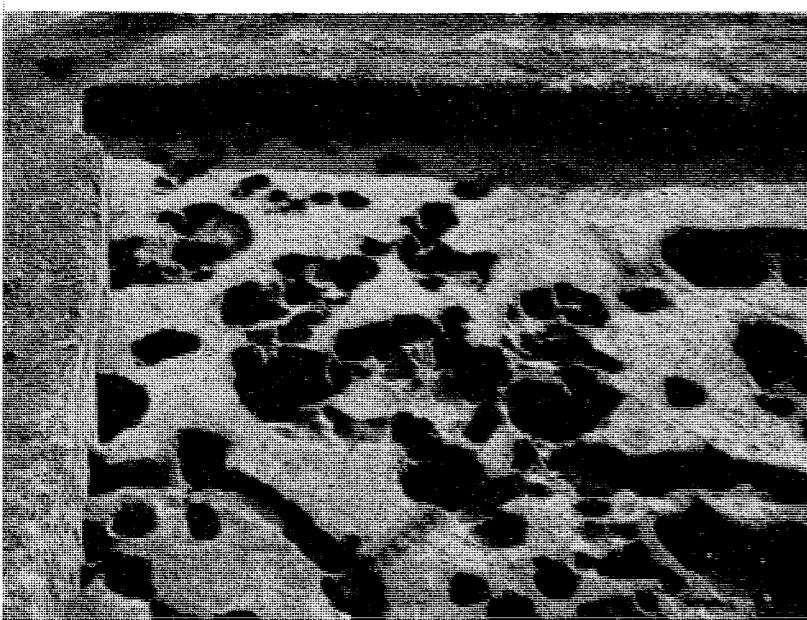
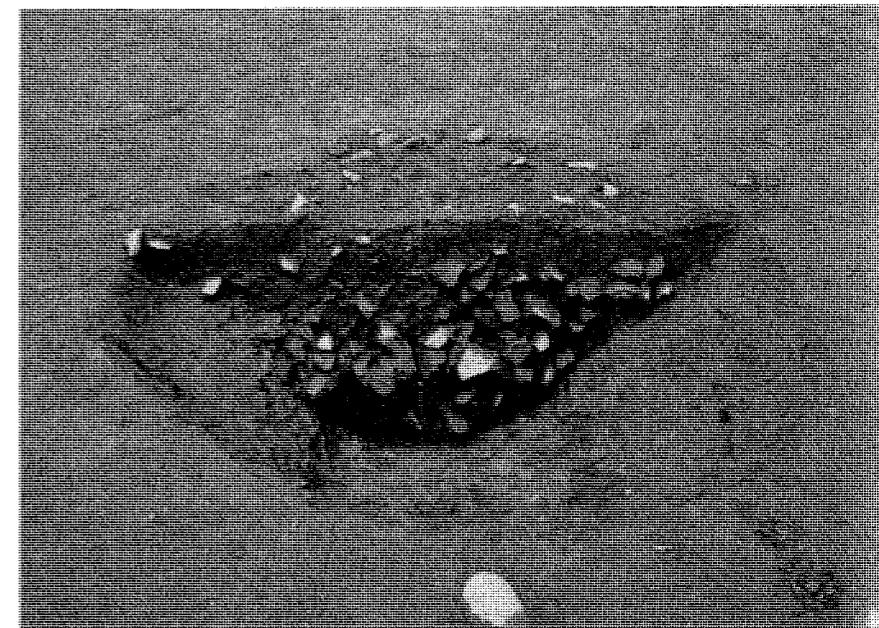
## 土壙

土壙は、住居址群の内側ばかりではなく、外側や、あるいは住居址と重複しているものもあります。直径1m前後の円形で、深さが50~60cm、壁がほぼ垂直な円筒形をしているものが一般的です。遺物を伴う例は少ないですが、完形土器や石が出土するものもあります。断面がフラスコのように底の広がった土壙もあります。

土壙SK24からは、大きな土器がほぼ完全な形で出土しました。口径48cm、高さが63cmというもので、もともとは住居にすべて、水甕として使っていたものでしょう。SK03では、底に石が約50個、さらに大きな石が1個出土しました。これらの土壙は何に使われたのかよくわかっていますが、墓、あるいは貯蔵用の穴といわれています。

## 集石土壙

縄文時代の遺跡からは、焼けた石が多数つまた穴がよくみつかります。門田遺跡のものは、直径1m、深さ50cmのすり鉢状の土壙に石がつまっています。石は拳大で、赤く変色して割れています。なかには、タールのような黒い付着物のみられるものもあります。土壙の下のほうは、ほとんど土がみられないほど石がつまっています。この土のなかには、炭化物もまじっています。土壙の壁面は、よく焼けてもろくなっています。これらの特徴から、集石土壙は、よく焼いた石で食物をむし焼きにした、調理の跡と考えられます。



## 土壙群

住居址以外の小さな穴を、まとめて土壙とよんでいます。写真左は、B地区南東隅で、集中的に検出された土壙群です。この位置は、重複する住居址群の内側にあたります。門田遺跡は、300軒以上の住居址が、直径約150mの環状にひろがる典型的な集落の形を示していますが、環状の内側には、多数の土壙群が構築されているようです。このように内側に土壙群をもつ集落遺跡は例が少なく、この地域の中心的な役割をもつ集落と考えられています。当時の集落相互の関係や、ひいては縄文時代の社会を解明する上で重要な問題点を含んでいるといえます。

**土器** 日本列島で土器が使われ始めたのは、今から約1万年前と考えられています。土器の使用によって、調理法に煮ることがくわわり食物の消化・吸収も促進されたことでしょう。

この時代の土器は、表面に縄をこころがした文様のあることから、縄文土器、または縄文式土器とよばれています。700℃前後の低い温度で焼かれた素焼の土器で、一般には茶褐色をしています。底から順に、粘土紐を積みあげてつくられたものでしょう。

土器は煮炊き用に使われたもので、基本的な形は深鉢形土器といえます。最古の土器は底がとがっており、尖底土器とよばれています。前期になって平底にかわり、以後この形が主流となります。このころから浅鉢形土器など、器形の変化が多くなってきます。つぎの中期には、立体的な装飾が発達し、豪華な土器が出現します。門田遺跡からも、この時期の特徴的な土器が、豊富に出土しています。

縄文土器は、数千年という長期間にわたって、全国に分布していました。この土器にあらわれた器形や文様のちがいなどから、年代や地域をることができます。土器の様

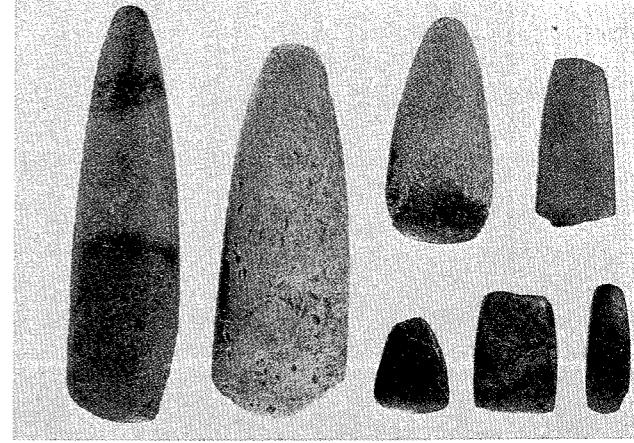
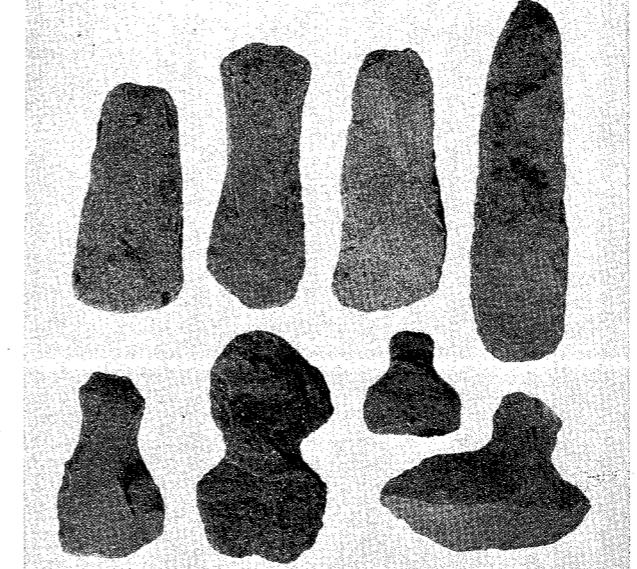


々なちがいをもとにしたあるまとまりを、土器型式とよんでいます。縄文時代のように文字のない頃の年代は、型式を年代順にならべた相対年代であらわされます。いわば土器型式は、時間をあらわすものさしの、細かい目盛りといえます。

土器型式は、その標式となった土器を出土した遺跡の名前でよばれています。たとえば、縄文時代中期の「勝坂式」は、神奈川県相模原市勝坂遺跡、「加曾利E式」は千葉県千葉市加曾利貝塚E地点出土の土器を標式として名付けられました。写真の上段は勝坂式土器、下段は加曾利E式土器とよばれるものです。

勝坂式土器は、把手が発達して雄大なものになっています。人間の顔、鳥のくちばし、ヘビなどをまねて作ったような把手がみられます。写真左の土器は、目や口がつけられていないという変わったものです。文様には、ヘラで彫刻したものや、縄文をつけたものなどがみられます。

加曾利E式土器になると、把手はほとんどめだたなくなります。口の近くにつけられるうずまきの文様が、特徴となっています。



◀打製石斧など

▲磨製石斧

**石器** 縄文時代の道具としては、石器が一般的です。材料になる石の性質をうまく生かし、いろいろな用途に使いわけています。

**打製石斧** 砂岩などの周辺を打ち欠いて作られた土掘り具です。ヤマイモやカタクリなどの植物を採集したり、住居用の竪穴を掘るために使われたと考えられます。縄文時代中期、とくに関東地方や中部地方に増加する傾向がみられます。これは、球根などの植物食がさかんになったことを意味するのでしょうか。

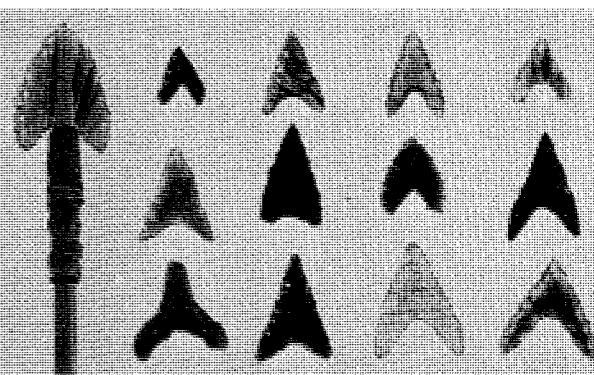
**磨製石斧** その名のとおりよく研磨され、鋭い刃がつけられています。木材の伐採や、その加工に使われた工具と考えられます。

**石鎌** 矢の先に着けられたもので、狩猟具と考えられます。材料は、ガラスのように固くて打ち欠きやすい、黒曜石やチャートなどが選ばれています。この付近では黒曜石は産出しないので、交易などで手に入れたのでしょう。

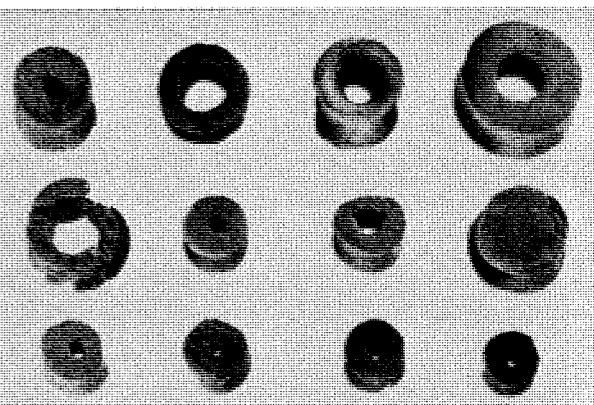
このほかには、中央の凹んだ大きな石皿や、丸い磨石があります。いずれも、表面のザラザラした安山岩や、花崗岩などが用いられています。この二種類の石器を使い、ドングリなどの木の実を割ったり、すりつぶしたりしたものでしょう。

**耳飾り** 縄文時代中期以降の耳飾りは、土製で、「耳栓」とよばれています。円筒形をしていて、中心に穴があいているものが一般的です。その形の連想によって、滑車形、臼形耳飾りなどともよばれています。赤く丹を塗ったものもみられます。耳たぶに穴をあけ、そう入したものでしょう。埋葬された人骨の例からみると、女性よりもむしろ男性の方が耳飾りを着用していたようです。

**土偶** 粘土でつくられた人形のことを土偶といいます。豊かな乳房や、妊娠を思わせる腹部のふくらみなどから、女性をかたどっていると思われます。安産のお守りであったかもしれません。また、土偶は完形品が少なく、ほとんど破損して出土することから、故意に土偶を傷つけ、病気や傷などの身代わりにしたとも考えられています。門田遺跡からは大足の土偶も出土しています。足の指は、はっきり5本描かれています。



▲石鎌



▲耳飾り



▶土偶